



繪本忠臣藏
後一篇
一

中村進午文庫
文庫5
702
11



所屬 HBS
部門 IV
514
工
文

所屬 HK
吉 中村健文庫
番 1
小 612

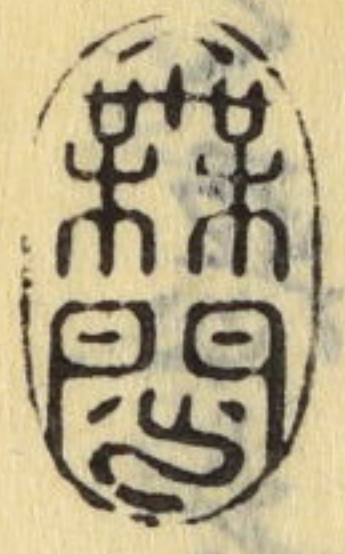
文庫 5
702
11

昭和五年一月十日
中村本天氏 贈

昭和三年十一月二十七日
法學部研究室より移管

故中村

題首



早稲田大学
圖書館藏書

四十七士前儒多有異論其
於事君豈有所未盡耶然
舍生取義孟子之嚴既稱諸
書且也
國初以來稱義人者僅止此一

輩匹夫匹婦之所興起其風
朝夕藉口而尚猶齷齪之不置
其將何以誘善于人也余常以
宋儒指擿先賢為刻薄非君
子之道也君子成人之美夫子
惡稱人之惡者况嫉人之善者

乎前儒之言其當否雖未之
益損于義人亦吾道罪人也
近來坊間刊畫本射利者率
多不根小說甚至中冓鄙猥
不可展覽今觀此卷其說本
義人錄更廣異聞猶之曾豎

之事乎亦以義為利者其或
勝陋儒之見乎是余所以不
退書肆之請為跋一言也
丁卯冬十一月南豐書



繪本忠臣藏後篇惣目錄

卷之壹

○夜討遺事

○義徒等親故防他援圖

○義徒等罷高野氏邸圖

○其二

○其三

○兩侯逸事

○數矢久馬於應事被辱圖

○高貞刺血染纓圖

○異僧相高貞圖

○其二

卷之二

○義徒懃法思しんぼうし。因圖

○附近松家僕以誠忠感其主。因圖

○義徒等過酒肆。因圖

○兩使到千戶氏邸。因圖

○川賴寺岡掉小船先諸士到泉成寺。因圖

○義徒等祭首于墓前。因圖

○其二

○泉成寺和尚給酒食於義徒。因圖

○遠森遺留物整巾信管紙號。因圖

卷之三

○僧徒漸護泉成寺

○不義士到泉成寺。因圖

○附良金知訛言。良金為非優視餘勇。因圖

○瑤成尼令侍婢勞諸士。瑤成尼對寺問夜討狀。因圖

○侍婢外扇閱高野氏首級。高貞夫人以資裝金救百姓。因圖

○右兵衛請養父名。滿成亮使僧爭高野氏首。因圖

○足利家始論諸士

○官使到泉成寺

○義徒等被配置諸家邸。因圖

○其二

○其四

○其三

○其五

卷之四

○伊久田喜内為頼母義子

○喜内為其主設奇計令飲藥汗圖

○其二 由良之助趣山名城圖

○諸士始服由良之助大量

○插花變告大函 同圖

○大星妻嚴家事禦悔圖

○大星訣斷制諸士惑乱

○諸民載酒送大星

○附老僕勝助請遺物 同圖 同遺物摸圖

○大星卜居山科

○附山科稻荷怪異 同圖

卷之五

○大星茶街避間者 同圖

○大星簇山科向鎌倉

○附途中逢奇難 同圖

○原郷右工門元辰像

○元辰出身 元辰討小野木兄弟散屈辱圖

○高貞識元辰於下賤中 同圖

○附元辰仕鹽治家 同圖

○片山源三右工門高房像

○磯谷十郎右門正久像

○高房令正久止死全義 附正久孝母話

○矢間喜内光延像 同十太郎光興像

○客僧相光興手文 同圖

○光興斬愛女避疑 同圖

○附喜内吟辞世和歌贈元助

卷之六

堀井弥兵衛金丸像

堀井安兵衛武庸像

金丸父金武賭賞除蟒害
鳥山城中王蛇害人民
其二

金武退治巨蟒
其二

金丸暗悟凶事報弥太郎仇
黑田權左門挑照女

權左門害弥太郎
金丸捕黑田

武庸寄食鳩瀨氏
松野新五右衛門落馬

松野強罵鳩瀨
愚闢諍端

卷之七

武庸即時復叔父鳩瀨仇
司

松野誑害鳩瀨
其二

寺田藤十郎幼欲報父仇

林平兵衛盜主家金害寺田逐電

堀井妻子賞花遇危難

司
其二

林謀寺田諺約所會

司
其二

卷之八

寺田与林會鷹田馬場報父仇

附武庸勇義助寺田慶盛惡徒

衆人聞復仇期群高田馬場

林門弟等使平兵齋強令寺田

武庸助寺田令復仇

其二

其四

堀井金丸請武庸為義子

附武庸竊候高野氏郎

寺田與林會鷹田馬場報父仇

卷之九

小野寺秀和配風流 附夫婦贈答和歌

遠赤林祐右衛門因像

大星力弥良金像 良金能守道君父之際

良金殉義諸士強臆始見

良金竊討萩野兄弟 其二

良金慕母還被邀

片谷市之政利像

政利為繼母所誣

岡野銀右衛門包秀像

包秀代父殉義 木村園右衛門重行像

不破勝右衛門種像

武木林喜多八隆重像 包常篤實感動人

三村三右衛門包常像

千崎弥五郎則休像 加藤与茂七教無像

繪本忠臣蔵後篇卷

五

卷之十

○四家優礼諸士。義徒等賜丸圖

○松田侯愛惜力弥

○磯合側室守節義母子自殺于墓前圖

○元川侯賜春服於大星等

○芥九太夫以惡報餓死於荒神河原圖

○元川侯賜雀於諸士等

○義徒等奉命各自盡

○堀治家晒家寶圖

○四諸侯捨金葬諸士等於泉成禪院

○義兵瀆貴功德於千載圖

○芥九太夫逸事

○天川屋義兵屬逸事

惣目錄終

繪本忠臣藏後篇卷之一



目錄

○發端。山科西野山巨大星殿居遺跡之圖

○夜討之遺事

○義徒等高野氏之邸襲圖

○其二

繪本忠臣藏後篇卷之一

焦心飲膽薄
 云潛鉅
 死而不死名
 姓永光

繪景古... 後古用...

以上

其二

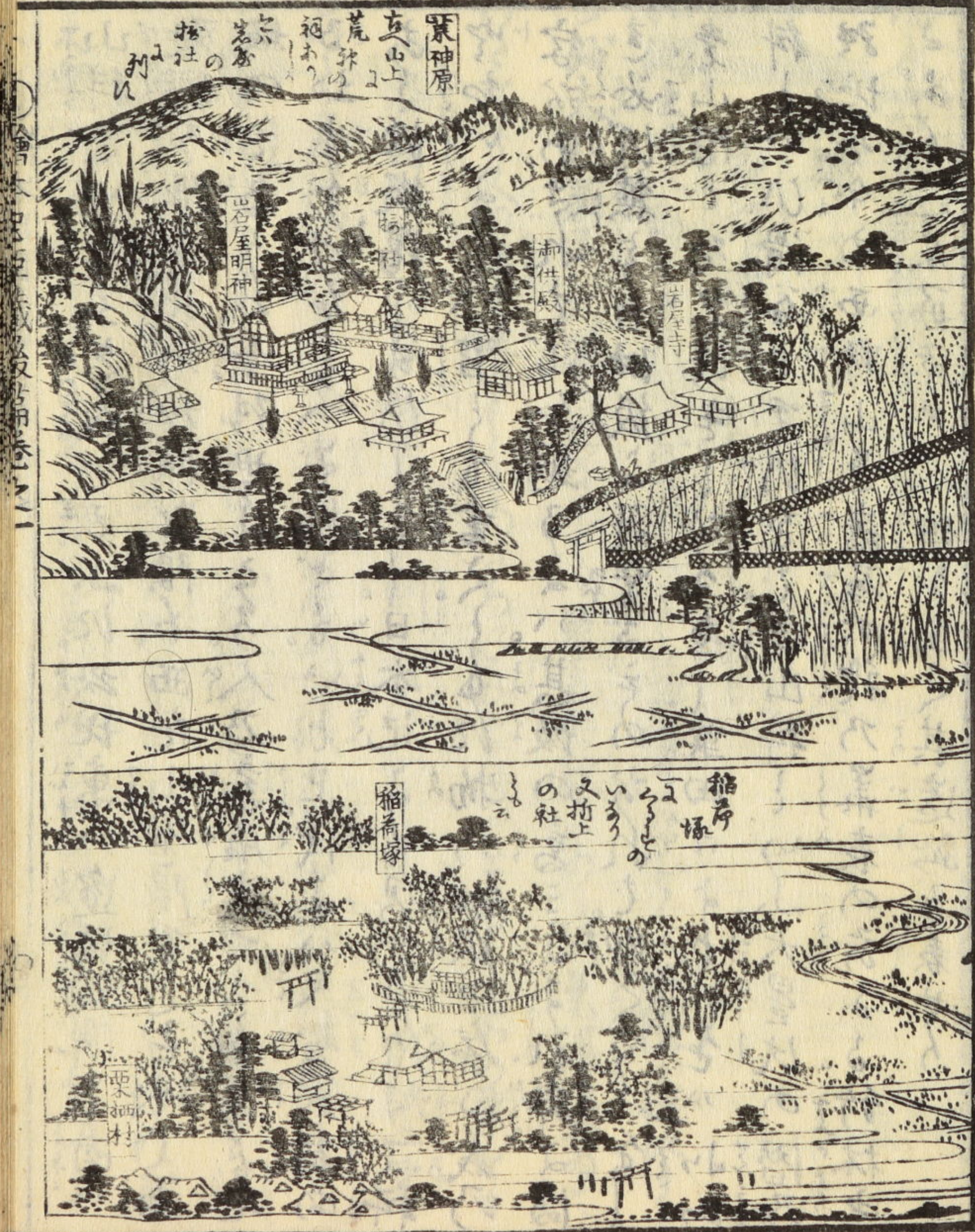
○行脚之具僧高賣相

○高貞指切洙

○救矢久馬臆病以朝哢

○兩度逸事 附論說

繪景古... 後古用...



荒山 荒山
 神原 神原
 社 社
 岩 岩
 山 山

山石至明神

柳井

山石寺

稻荷家

稻荷 稻荷
 又上 又上
 の社 の社

西水



山科西野山邑大星假居遺跡

宅宮

京道

大星屋敷

其の門 其の門
 市川氏 市川氏

山石

山石

道寺徳勅

山科西野山邑大星假居遺跡
 其の門 其の門
 市川氏 市川氏

山科といふ名義を思ふに此地東ハ邊坂極限至南ハ
醍醐を限里北ハ松坂を限西ハ山を限里至北へて山
坂のそよりわ今世より人乃家居建つてきてこそ
るおとろげをへざれどもいと上代ハ天智天皇の
あゝに縦横しあひし日本記も月へしりて科
字あわされた山を越るハ其坂の高きまれば鼻は
ま必じ麓をわ此級ハ強ゆるそのおれを即こころを
粟山階と名づけおしなるあり粟田口よりわをバ山
科といひ滑谷と里のを南山科といふ大星氏の潜屋
跡地を今の西野山邑巖屋町此乃兼表のあふる竹林中
とあり近來おる乃人碑を立ち其造跡を表せり

繪本忠臣蔵後篇卷之壹

葦端

夜討遺事

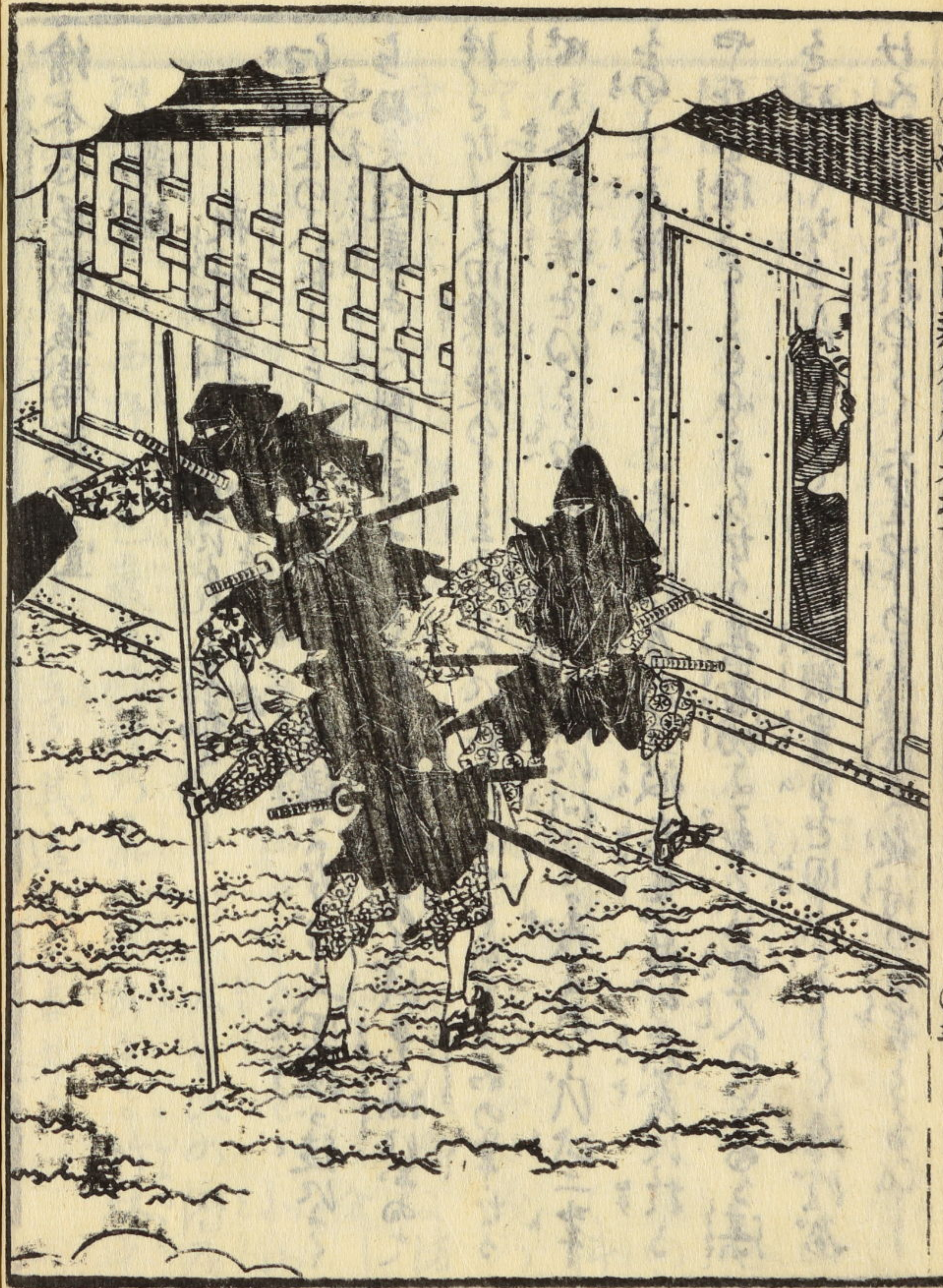
前篇のれ一草并は
其事をもとく奉り

江湖上の人物もとらば義徒をゆく藤讓はなご入田播が徒はく
らぬ夫趙妻子ハ大國の志より一單方の故よあはび是謀におおこ
はるなり又田播が徒のそよりならにわは休やそのさる所の草なる
時ハ各封侯をひらぐおあり是則義に似く義よあはびは二草
をひく義徒ははるよ大星をある彼大星が徒の大義に於る
や我を優ふこそよよりなり其成功よあはハ聖人のいふも謀
を好んぐなるものありしに庶幾豈目を回しりて縁は
けんやよは形のごく大星の義徒は夜討のさ苦くあひ

義後
親故
防他
援固



義後親故防他援固



る頃ハ元禄十五年十月十日の夜乃半あり昨夜より雪降り
いづれもいづれも雪降りしに雪始々晴りしに
乃月のお陰でいづれも雪降りしに雪始々晴りしに
の浪世界かあせりけりよけ夜もあつて堀井が電に合合せし
徳士よいひ先別より各方かたへしし
年ころの事

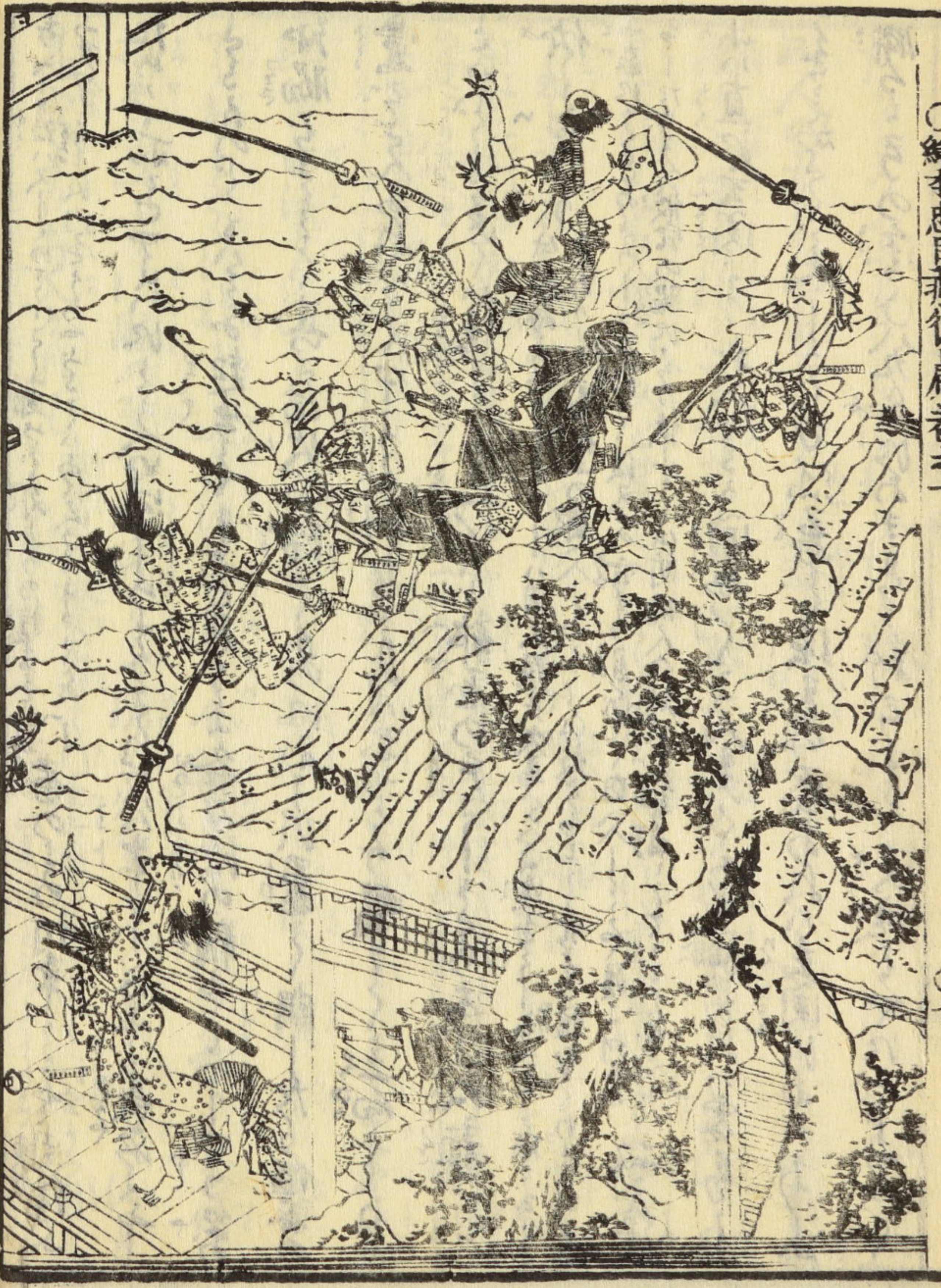
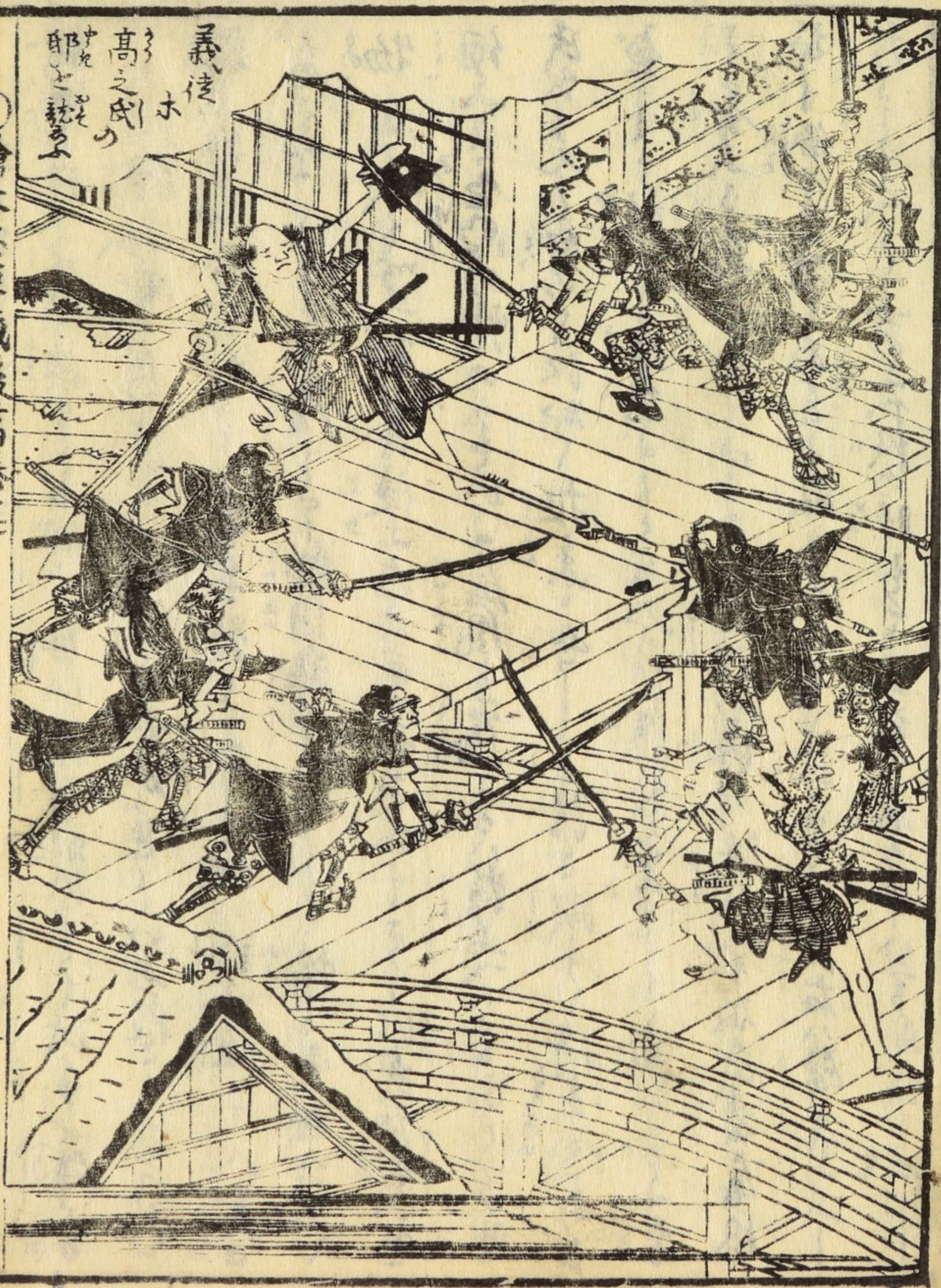
雪の降りしに雪始々晴りしに雪始々晴りしに

かく雪中に感はりたり是必し半を過ぎの前表を各入
いづれもいづれも雪降りしに雪始々晴りしに
の乃いよもいづれも雪降りしに雪始々晴りしに
今かくいづれも雪降りしに雪始々晴りしに

別天地鬼神もあつて誠忠を感應はりしに堀井が
托ししに雪降りしに雪始々晴りしに
勇もいづれも雪降りしに雪始々晴りしに
多るに又怪しむ雪降りしに雪始々晴りしに
武士凡そ百人斗ふに雪降りしに雪始々晴りしに
うせの雪降りしに雪始々晴りしに
町に八百屋甚多し雪降りしに雪始々晴りしに
中不ぬに押ししに雪降りしに雪始々晴りしに
いづれもいづれも雪降りしに雪始々晴りしに

と一々後の勅諭と見れば早速仁本殿へ召し遣はし候とて一々
御一其は是れに候とて格別の優遇ありしは法ありとて一々
の年々の得難なるは早速義和とて召し遣はし候とて一々
刻に候にお火ありとて一々格別とて一々召し遣はし候とて一々
起る表の方と伺ふとて一々召し遣はし候とて一々
門前におり候とて一々格別とて一々召し遣はし候とて一々
兼ての候とて一々ありとて一々其候に本意ありとて一々
たゞ武士御方よりお召し遣はし候とて一々汝河原のなれば
と候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
を辭せられ候とて一々青お波世のありとて一々召し遣はし候
の品あり候とて一々中へ入らば召し遣はし候とて一々
一に候とて一々あり候とて一々其候に本意ありとて一々
る左右に目を合せ候とて一々召し遣はし候とて一々
免れ候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
あり候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
場あり候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
てやうに召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
お召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候
とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
三河屋といふ間を打と夜中をぐるは召し遣はし候とて一々

一に候とて一々あり候とて一々其候に本意ありとて一々
る左右に目を合せ候とて一々召し遣はし候とて一々
免れ候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
あり候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
場あり候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
てやうに召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
お召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候
とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
候とて一々召し遣はし候とて一々召し遣はし候とて一々
三河屋といふ間を打と夜中をぐるは召し遣はし候とて一々





より長をいりて大勢を獲てかくまへりて抑へしむるもさき
 氏を討りしせしむるの味をさしむるにせしむるもさき
 所と地打あつくりやねぬは間もあはし人あつくりの絶目
 と値人よりいりてのろもいりて人々を警巾をさつくりと
 やさとの天軍といひあつくり種めよとも見取しとぬるものあ
 ばや抑りしむるは空魂いつくまへて一念六丁の鬼高を
 ぞぞとあつくりあつくりとせよ姓あつくりさあつくりのいは刺
 らえりて同似をあつくりあつくりと叫びて打倒し息をなげけ
 ばは時つりてなを難部を人ありとせしむるは
 かりとせしむる危あつくりと今いひはねし清心安うねりあつくり人
 の影とせしむる今ねとせしむるはよりの中いりあつくり

ゆりかこりていりては行よとて一回は難部を目げけ五圍は樂お
 再びむつりせしむる今い生非の懸命とやあつくりのいりては
 古林山平と名をつりてあつくりを堀井安房はは古馬にせしむる
 不破勝を馬ハ山平にけりあつくりと若くあつくりとせしむるは
 一人難部をのゆあつくりとけりあつくりとはをさつくりとありあつくり
 と南無八幡矣とていりてはをを投あつくりとては内暗とていり
 とねたれとて矢間十を帯とては十又家の陰とていりては抑りていり
 と一実あつくりとては樂が改とていりては後の破に判をせりて武
 と人多かつくりとてはさつくりとては倒せしむる頭は血を染あつくりとて
 と長常とてはねなつくりとては老人あつくりとては大星則師直あつくりとて
 といりてはあつくりとてはいりては頭と肩と古疵あつくりとてはいりて

繪本忠臣蔵後篇巻之二

十九



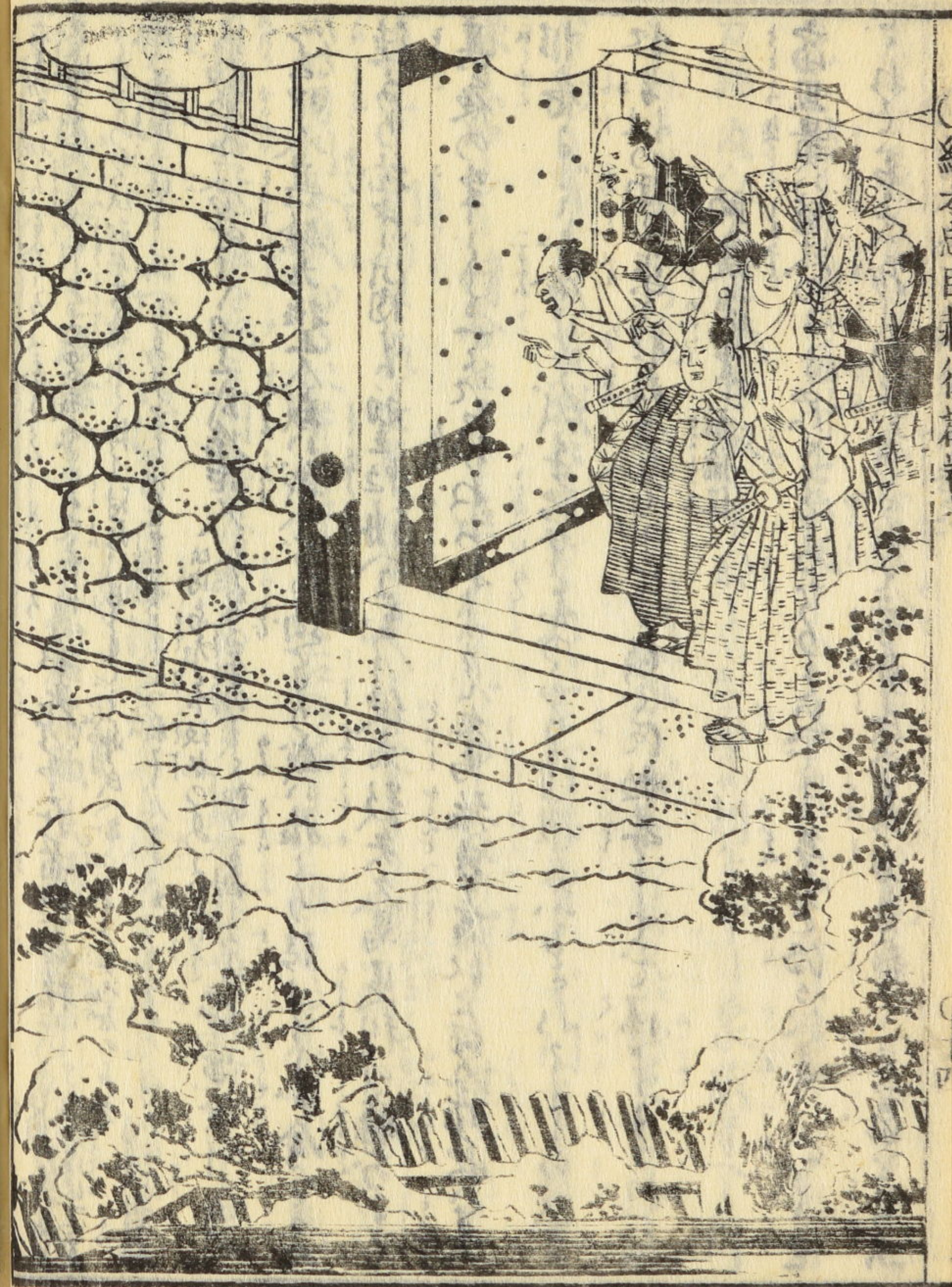
繪本志目新後在卷之一

高田の敵首をとりし是志摩八十を其を久田貞直のあまをりて
是を捕ら武蔵郡井を前隊の一中央の申せり介をまきりあ
力弥及びあつた馬を敵く一むく三隊の列をみ一泉成寺一川
をけつがたきつてぐおりのやうに本家の進みかつらんは必定あり物時
いとおく言ふりの若我に言まれば一先は界きつていかに移る
休息かごとく侍合せり退りありはあつた一戦一討北をあらえ
ゆをむし別府よりおを告は界きつてあつたり
此時同列を致しむに芽田仲彦は右の賜よ小畑を召本村園を馬は
たの申指に小畑を召三川助武蔵郡多八知賀松又古木各ありはく
小畑を召りていづれもいづれも小畑治を加つる程のていふおはに扱又
さき世々の家中を懸槍とるよ子長右衛門は顔し脊中に浅紙あり

高田の敵首をとりし是志摩八十を其を久田貞直のあまをりて
是を捕ら武蔵郡井を前隊の一中央の申せり介をまきりあ
力弥及びあつた馬を敵く一むく三隊の列をみ一泉成寺一川
をけつがたきつてぐおりのやうに本家の進みかつらんは必定あり物時
いとおく言ふりの若我に言まれば一先は界きつていかに移る
休息かごとく侍合せり退りありはあつた一戦一討北をあらえ
ゆをむし別府よりおを告は界きつてあつたり
此時同列を致しむに芽田仲彦は右の賜よ小畑を召本村園を馬は
たの申指に小畑を召三川助武蔵郡多八知賀松又古木各ありはく
小畑を召りていづれもいづれも小畑治を加つる程のていふおはに扱又
さき世々の家中を懸槍とるよ子長右衛門は顔し脊中に浅紙あり

兩度逸半 附論

高田の敵首をとりし是志摩八十を其を久田貞直のあまをりて
是を捕ら武蔵郡井を前隊の一中央の申せり介をまきりあ
力弥及びあつた馬を敵く一むく三隊の列をみ一泉成寺一川
をけつがたきつてぐおりのやうに本家の進みかつらんは必定あり物時
いとおく言ふりの若我に言まれば一先は界きつていかに移る
休息かごとく侍合せり退りありはあつた一戦一討北をあらえ
ゆをむし別府よりおを告は界きつてあつたり
此時同列を致しむに芽田仲彦は右の賜よ小畑を召本村園を馬は
たの申指に小畑を召三川助武蔵郡多八知賀松又古木各ありはく
小畑を召りていづれもいづれも小畑治を加つる程のていふおはに扱又
さき世々の家中を懸槍とるよ子長右衛門は顔し脊中に浅紙あり



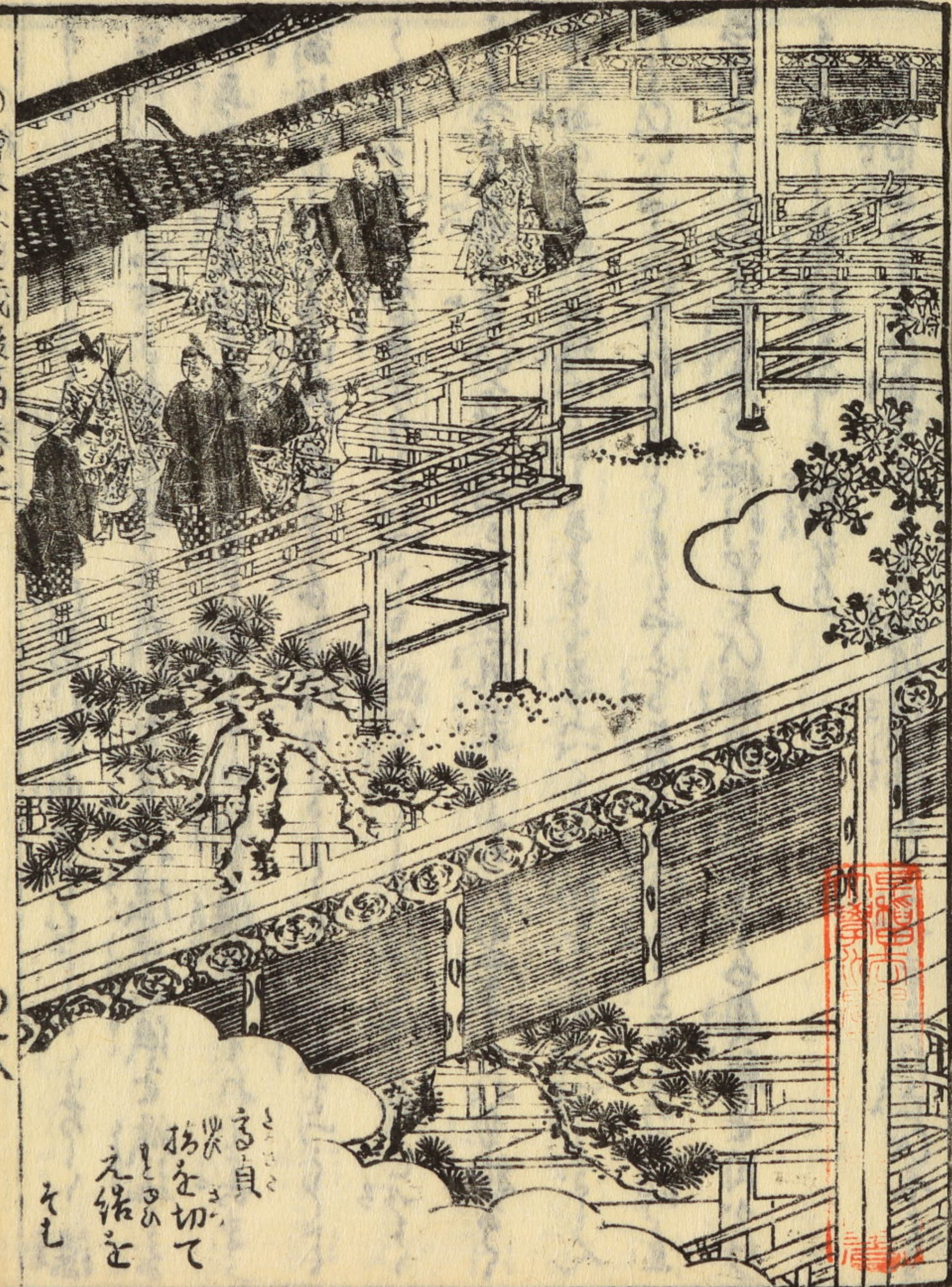
結衣氏由捕役捕縛

やらむまじかみ泥をあらび後美をのこく列を遠くも義の
 命を食ふよりして徳を祀井氏の塩治氏に教諭あり其不
 義を知らぬ不義成りむにゆるげも是又機一瞬一妻の徳
 大をゆく中平の乃こく経海の一樹あり徳もは時成必
 まらこ末速く比世の他猶徳をわむ風俗おびり質操にてれ
 漢をゆく人よむこと慥あり初もその間平に及び武を尚
 ひ文をゆく人よむことふり塩治氏の二奉をゆくも若く徳を
 たりとるいふが比世や塩治氏武を長ド竹其志おとるは
 ろろおきて准中汗辱を受くるよりして是で比平貞の志
 たり仁志をまじり志と徳育りかみ味暴の初ひありは
 徳ゆえ人のいふ貞漢は後其志に殉る士は十浴人をとれ何ぞ

あらや仁志の心甚下に深く入るあはる人はいくがくのてくあは
 智伯の大國の志より一の徳をまふとまひの堂士をゆるの難
 みの比や見苟も仁志の心ある時其其國志をまふあは准
 る貞を經も暗昧の志といえぬ比中心思ふかざるあはれあり
 今この逸事をあはる貞常く教肝直らるに辱しをまふ
 いはれもよみ中平にまふあはるありあはる大使を殺すの目あり
 今貞常く肝直らる思のてく石の上におはあはるあはる
 清心門外極の大なる名を傳ありあはるあはる清心門外は
 持たせは西彼所に徳をかき佐分の侍名坊市をまふあはる
 相結より言貞をまふより胸より汗を又りや右程のまふあはる
 たりあはるあはるあはる大平あはる相殺の法則はまふあはるあはる

挿信と見聞ふに名東半ありしつちおころうかどめしし行りし
 しく用道の後箱くりよせしはあし衣震も老車一刺子敷る後
 に大玄関よもろろが師直は奥敷よりごころごころに有るはま
 しくあめりては判友後今日といふある御日揃はらぬまふと大使清
 澤の因よ。就中大切の目あめりて何事も今日の首尾まころ大
 事へ六おろよまろよはろろを職し〜かくは通るよ八行事と
 やり後の中掛〜ハ西谷今日の御役係を承る〜ならうけ〜
 旬まも貞の。怒りあ〜〜と大平し備〜あもと接時刻の
 後ハ全〜あ〜あ〜ハ悪〜まもの御方あ〜石の上刻し
 おせ〜お果〜けまらうたのほ〜〜御お迎ハ申用て
 おも〜〜や他成まのつま〜む〜〜やばは御ハ御殿〜〜御家

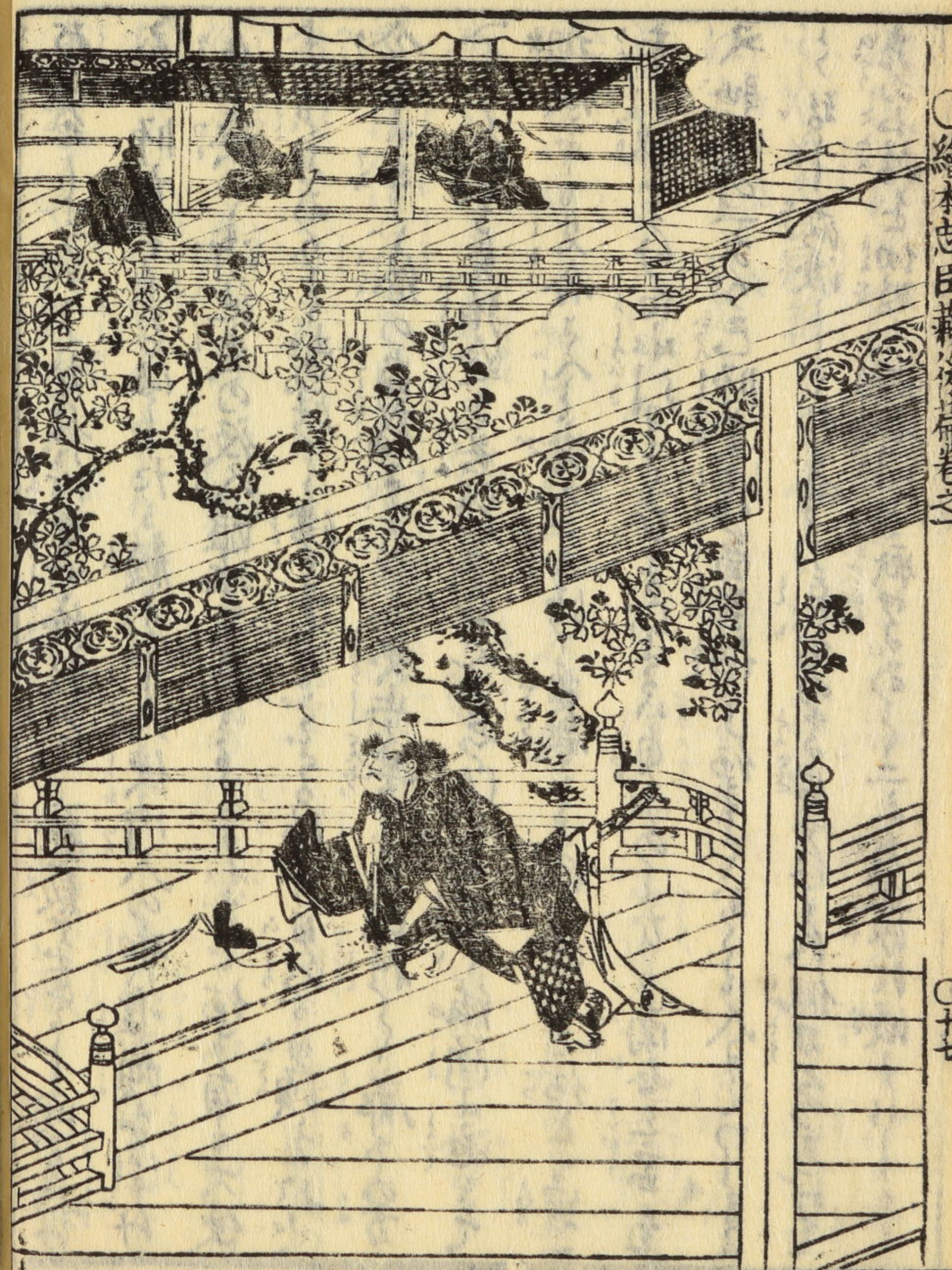
わるをし〜あ〜〜なわハ何卒御控れ合〜懇懇を〜聞〜あけ
 ふに御直〜〜とあ〜たる顔〜〜大使御入の御ハ唯頭を〜け
 ると接〜御地まの役人塩治も貞〜〜まを何も角〜大使
 より御このあり〜おのぼ〜滞〜〜は〜御目か日頃あわら
 今日〜〜縁の當惑〜〜〜矢止ま方〜の御控〜廊下の方
 〜まの御直途を考ひ〜せん〜〜御先〜結新〜通〜と
 御役ま〜見合〜と〜光をま〜〜御殿〜〜御夜〜〜御
 赤〜御を〜け白水〜〜〜ひ〜び〜〜御自〜の〜た〜南〜御
 又御辱の〜あり〜御直先高生何〜何〜〜人〜〜と〜と
 手〜御涙〜〜お〜〜御者の御貞〜〜御佩刀〜〜ら〜〜ら〜
 左の御指を切破り彼水〜と〜御は〜あ〜二〜血に浸〜〜〜と



言真
物を切て
え館を
そし

Red square seal impression with vertical Japanese characters.

Red square seal impression with vertical Japanese characters.



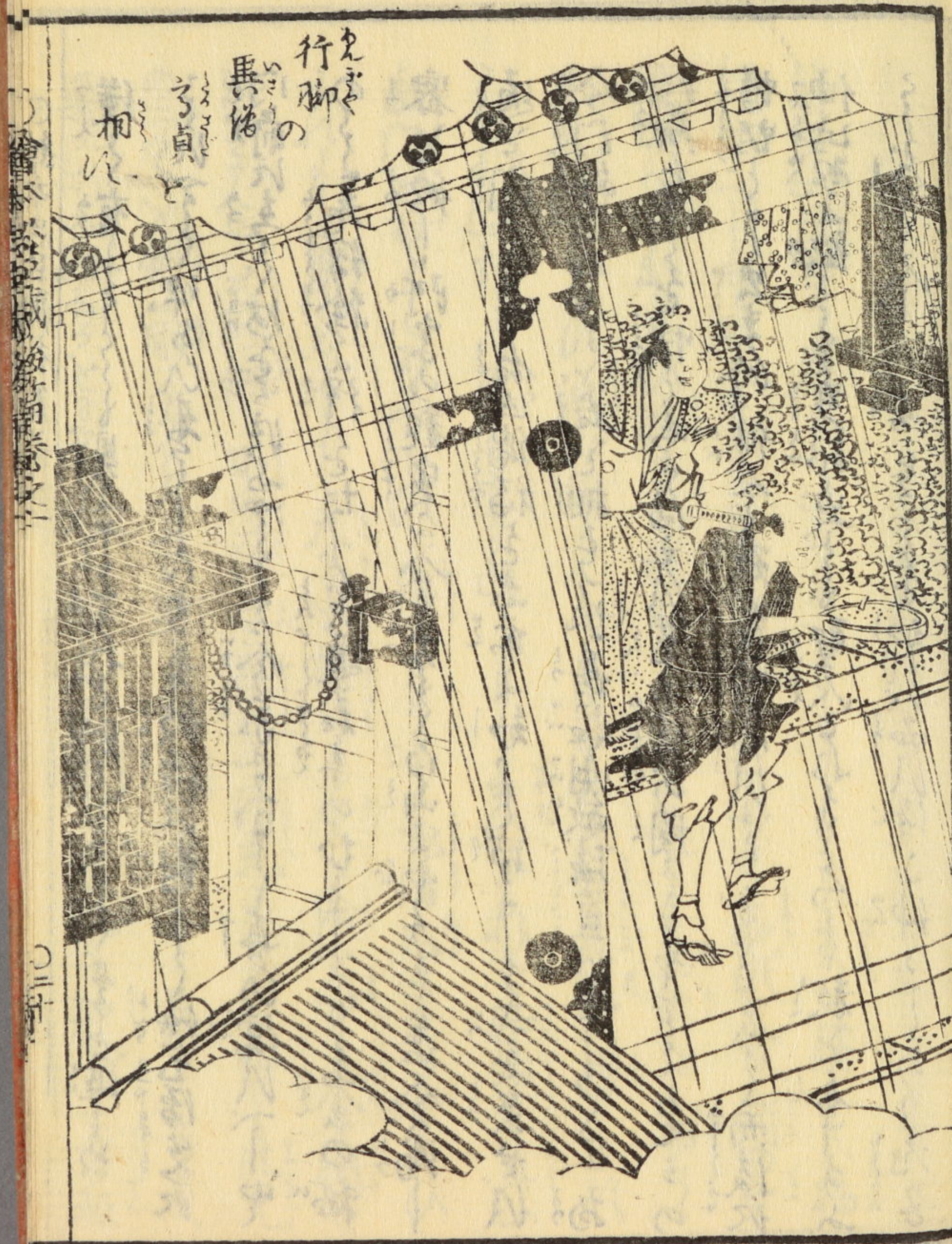
繪本忠臣蔵後篇卷之二

C 十七

りの糊つとくはるあひだ血まじらひてあかく
 染らばいせしむせとまじりてあつむぐり持懐中の紙を紙搥ま
 一毎の毎よひとわへまじりて幾やの紅を染出まねと具す
 筋にたゞしむる中痛むからむと清りて指の疵を
 くらたぶらぬ不肖なりといひて一城のまじりて殺す代り
 さらさらあまの生いあはれ命を亂軍のまじりにあまのれ勿神あ
 も又母のまじりに傷つてはまじりてあまのれあまのれあまのれ
 たまひいせにあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 とひあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 ませりて鬼神といふはあまのれあまのれあまのれあまのれ
 或人回家のまじりにあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ

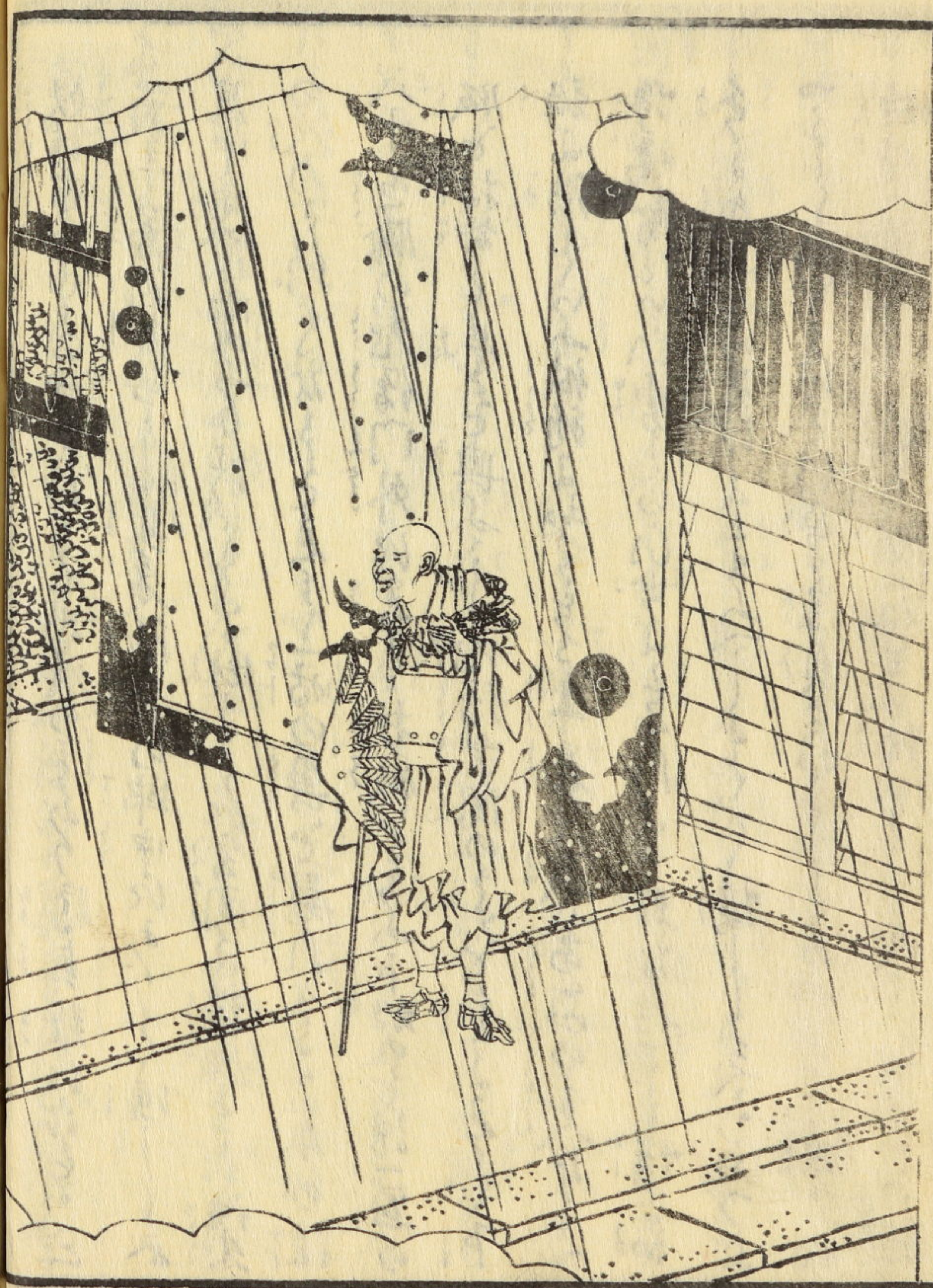
妖障が先きのとてあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 箇年のあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 月中旬霖雨のあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 の入りあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 八十五除の老僧門外にまじりてあまのれあまのれあまのれ
 版と持あまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 詠は清くはあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 吟鳴智といひあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 まじりてあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 あまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 遊侍のすまじりてあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ
 遊侍のすまじりてあまのれあまのれあまのれあまのれあまのれ

繪巻 結不忠臣相行着巻之



見ま
行脚の
異宿
の
相
い
と
直

〇
三
九



〇
三
九

〇
三
九

謹く有(り)き一(い)へも具(も)て一人(ひと)を(い)くはと進(ま)め
 べしとす(べ)し味(あ)ひの事(こと)も(い)はさる(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 門前(もんぜん)に在(あ)り河(か)を(わ)りた(と)る(べ)し今(いま)も其(その)人(ひと)を(い)くはと進(ま)め
 わ(ら)る(べ)し老僧(らうそう)徐(しゆ)く(わ)りた(と)る(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 密(ひそ)と修(しゆ)一(い)へも其(その)觀(かん)定(ぢやう)は(い)ふ(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 通(と)と別(べつ)し(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 今(いま)門(かど)外(がは)の(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 屈(く)を(わ)りた(と)る(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 樓(ろう)切(き)し(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 伸(の)び(た)る(べ)し其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)

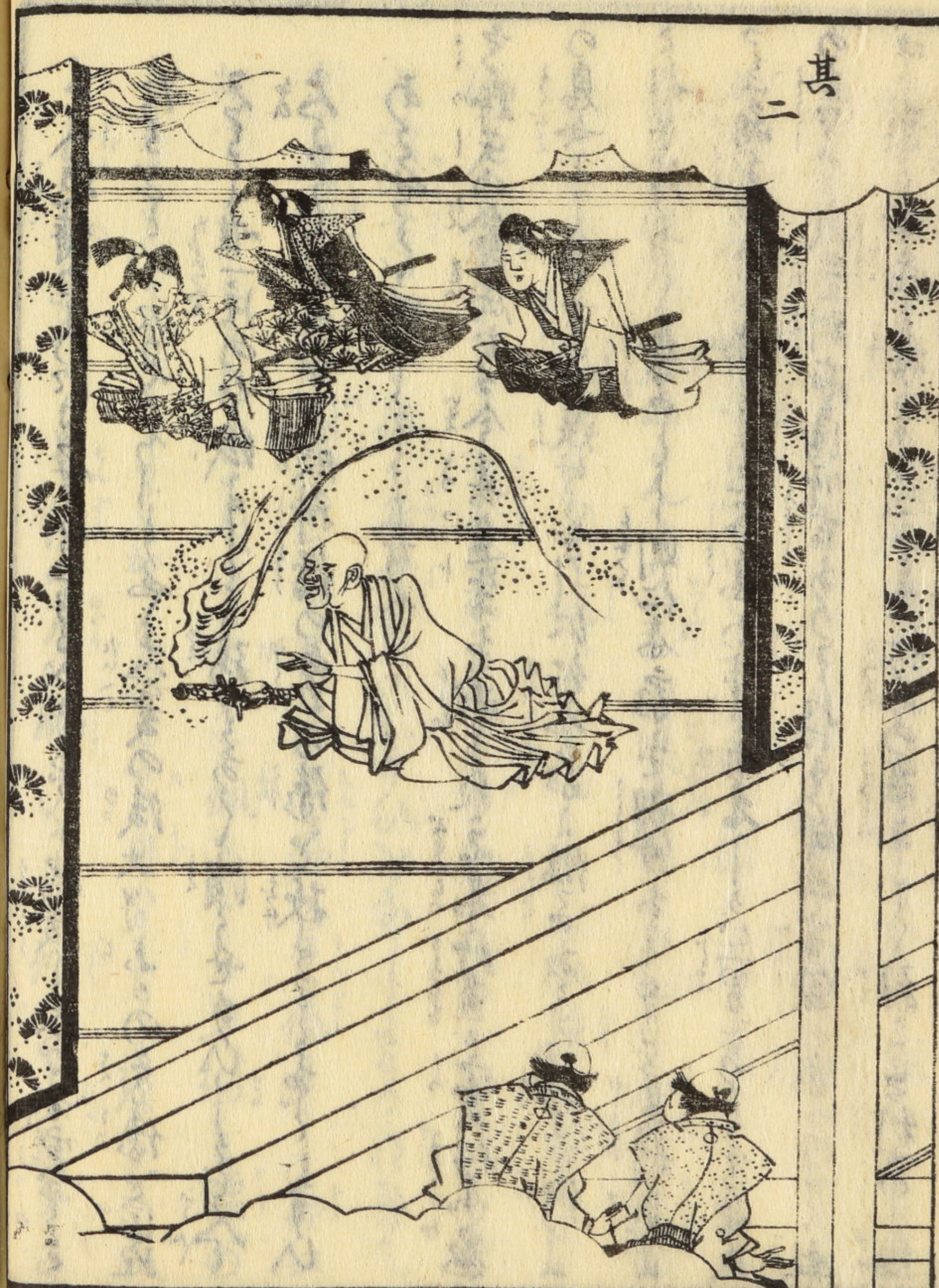
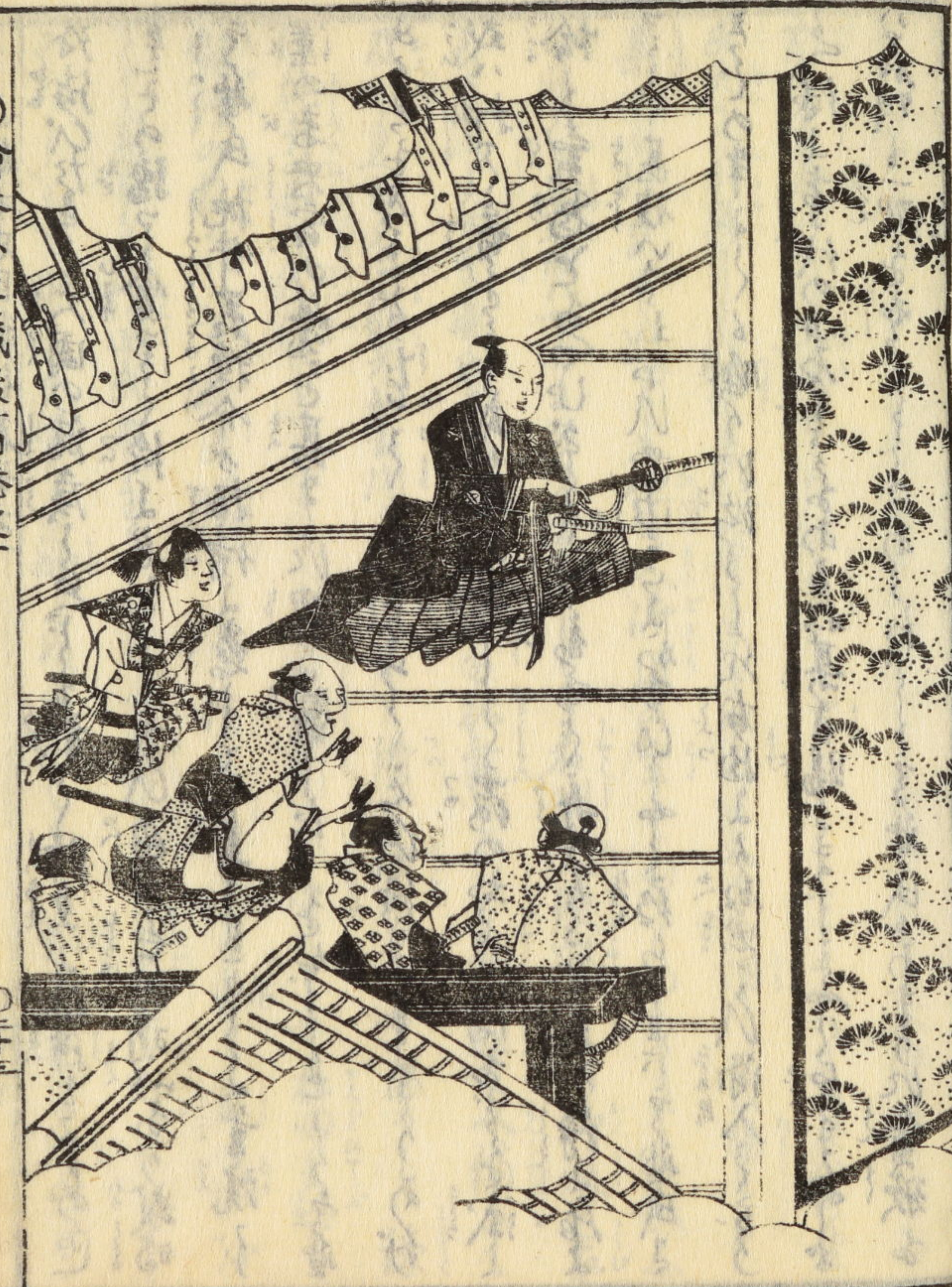
も水の石(いし)と持(も)て(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)
 一(い)へも其(その)後(のち)僧(そう)に對(たい)

續神皇正統記卷之三

と信えしありしを老僧臥せり厚きとありけりあまの
やむもまじりしより新不強のあなれが月一樹なるこの中より
あり今敏玉保は是是と山しつあまのびく改まきとせしが
首よりひたる平ゆえより此の護身とありし今日結縁
よまをまじりしより信よりまじりしは持て改まきと
ひしはあまのりより直おとすまをまじりしはひとや
そのひ方とせむれど若き身のおりいとありまじり信無
き真徳護身と國とありしより昔神のまじりしはひに
かゝりしよりまじりしはひと大刀と佩りしよりゆへ腰の
まじりしよりひしよりまじりしはひと直いまじりしはひ
く直いまじりしより信のたの賜いしよりの地のたかとまじり

とと近侍のめいせしはひとまじりしはひと脇後と大刀と実母と
たるがとくはひとまじりしはひと大妻の後と太刀おのまじりしはひ
まじりしはひと唯一層のまじりしはひと消せまじりしはひ
たまじりしはひと被神僧のまじりしはひと授けまじりしはひ
あませしはひとまじりしはひとちん

うのい 及 其い いまもあつと いえん のりうあま かつ とうまけ
う野史の食度なる今其坐生をおつたえ本行直が家には本家
の息女よりと子と没けしよりには本家と信子ありはひく終り
こを清くし養子し一則に本家を相傳ありはひくは利をよ
こし病まきし娘よりと息女ありはひくは二男ありはひくは母氏
のまじりしはひは則に清師ありはひくは母氏有職のありはひくは
中よりまじりしはひは移りしはひは本家の南まじりしはひは利ありはひ



分結びたまふと大國の諸侯もさぞも敵く師直の抗御するもの色
是との強しを貪りし終るは身をうへあひあはせし祈りあり或時
之世氏 枕井若狭介が招請の意に承りてさうさうに書院に
漢の末代宮の夢を其すに現る製したるをかぎりし一うさ世
氏に召せしむるなりたにさうさうに終るはさうさうにわけ
或は抑く音もさうさうに或は面にもさうさうに病のおくはあはせし
恰も其病とあやむるに除るあはせしと若狭若狭若狭
さうさうに其病いさむるにやいさむるにさうさうに世氏に
さうさうの半はさうさうに除りに終るはさうさうに
さうさうに海より代の四るさうさうに其病も賜はさうさうに
は若狭も一現をさうさうにさうさうに世氏があまりに貪欲を

るを悪く思はるるの五半ありて其病は病系にひくはなれ
家のまゝにさうさうに除るはさうさうに
氏大さうさうに物にさうさうにぬるはさうさうに
其病さうさうに他日又清用の半もあるさうさうに
らけさうさうに其病はさうさうに若狭大使客毎の病後と若
らさうさうに耐え世氏ははるかに奸曲を拵舞はる若狭はさうさう
及らさうさうに若狭老加古川を計りて終るはさうさうに
に枕井若狭の健偉さうさうに又有時是利の殿中さうさうに
對話のおくさうさうに世氏懐中より清忠とさうさうに耳の垢
さうさうに世氏はさうさうにちやうどさうさうに
さうさうに世氏はさうさうにねがはるさうさうに

事ありさうあがし集り集り又き所ちちいふ事なり及ころあ
 り申は産の海を平生生きかたども老角に直愛いふに入らぬ
 に折もあがばあまらぬとあるに松田氏の何れあく何時ありた
 家来の者も財をせをいへりていへりていへりていへりていへり
 一に聖子抱き世氏より使者をゆく唯の津約深の加賀道二十五
 十丈たさるのてあねども松田家の長末は半を去りねばこの
 一一人は何いふに松田氏大よあまらぬとねく強敵ある老人
 ちあねあまらぬとあねどもあねどもあねどもあねどもあねども
 とあく海をゆく贈りさるねくさる世氏貪欲のさすまいたあ
 ちあねのちちちちちちのどい半どもあまらぬとねく後六列度も
 大さくいふるあまらぬとねく定武の贈りさるあまらぬとねく
 柴が奸佞

防がねとさる世氏自ら其の治まらぬに満度おを思ふゆへよ
 らうかへあひたんとあひいよく貪礼はのりさる果てあまらぬ
 ちあねあまらぬとあまらぬとあまらぬとあまらぬとあまらぬと

繪本忠臣蔵後篇卷之十終

